

## 図書館における高齢者の資料選択行動分析

梅澤 知史

内閣府の調査によれば、日本の人口における65歳以上の高齢者の割合は、2015年度には全体の26.8%を占めるようになっており、今後ますます増加すると予測されている。そのため、高齢者に無料で生涯学習や憩いの場を提供できる図書館の役割が期待されている。しかし、現在の高齢者サービスは、既存のサービスを変化・応用させたものであり、厳密に高齢者を対象とした図書館サービスがあるとは言い難い。そこで本研究では新たな図書館の高齢者サービス構築のため、図書館における高齢者の情報行動を、資料の選択という観点から調査し、高齢者の情報行動特性を明らかにすることを目的とする。

研究手法は高齢者と大学生に実際に資料を選択してもらい、選択理由を比較することによって高齢者にのみ見られる特徴を抽出する方法をとった。具体的には、筑波大学図書館情報学図書館の2Fを30分間ブラウジングしてもらい、興味のある資料を見つけたら、その資料の表紙を撮影してもらい、その後選んだ資料について30分ほどインタビューを行った。調査対象者は筑波大学附属図書館のシニアボランティアのメンバーのうち65歳以上の高齢者9名と筑波大学の大学生9名の18名である。

調査の結果、高齢者がブラウジングで撮影した資料の平均冊数は23.8冊、大学生は11冊であった。30分のブラウジングで、大学生には資料を手に取り中身を確認した後で、資料を選択しない行動がしばしば観察された。それに対し、高齢者にはそのような行動は見られなかった。ブラウジング後のインタビューで資料を選んだ理由を尋ねたところ、大学生が資料の中身に触れながら理由を述べたのに対し、高齢者は資料の中身にはほとんど触れず、自身の経験などを話す傾向にあった。

これは高齢者が資料を読むことによって自身の経験の振り返っているためだと考えられる。高齢者だけに振り返りが起こる原因は、退職などによって時間的余裕を持つようになり、それまで振り返る間もなかった自分の人生を改めて見つめなおす機会を得たからだと思われる。こうした高齢者に特有の行動は、認知症などを予防するための回想法にも応用できる可能性がある。

(指導教員 宇陀則彦)